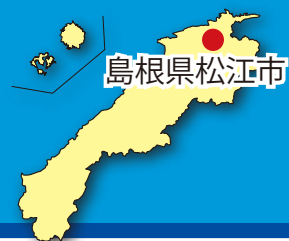


# 登録有形文化財・土木学会選奨土木遺産 島根県初の近代水道施設

## せんぼん 千本堰堤



明治時代、松江市民の飲用・雑用水は井戸水か湖水、あるいは市内を流れる堀川に頼っていました。しかし、井戸水のほとんどは飲用に適さないばかりか、堀川では洗顔から食器洗いまでする者も多く、伝染病の発生や流行の原因となっていました。このような状況を打破する水道敷設計画として、松江市は明治28年（1895）から内務省のお雇い上下水道技師バルトン、同省技師高橋辰次郎を招いての調査で忌部川の清流が最適であるとされましたが、財政上の理由で実現には至りませんでした。

明治末期、松江市に歩兵第63連隊の設置や松江駅の開設が予定されると、再び上水道設置の要望が高まりました。当初島根県は宍道湖の水の利用を検討していましたが、塩分が7%も検出されたため飲用水には不相当となり、バルトンの忌部水源提案が再検討されることになりました。

こうした経緯を経てバルトンの教え子でもあり水道博士と言われた中島鋭治によって基本計画が策定され、大正4年（1915）によりやく千本貯水池工事に着手できました。しかし、第一次世界大戦での労賃、資材の値上がりに加えて2年続きの豪雪で工事は大幅に遅れたものの大正7年6月に待望の初給水を開始、翌年3月には旧市内の全戸に給水が始まりました。

完成した千本堰堤は高さ15.76m、堤頂幅2.12m、堤頂長109.09mの溢流式直線重力粗石コンクリートダムで、溢流する水筋は間

知石の美しさを際立たせています。

「千本堰堤」は全国規模でみるならば35番目の近代水道施設です。それはとりもなおさず松江市民が長年待ち焦がれた水道施設であったということになります。初給水の年は松江市自治制施行30周年にあたるため、通水祝祭や来賓を招いての祝賀会が盛大に挙行されました。功労者表彰のなかにバルトンや中島鋭治の名前があります。島根県初の水道施設が地方における近代化を感じる大事業であったことが想像できます。

千本堰堤完成の翌年となる大正8年、忌部浄水場が築造され、その後、幾度かの拡張されながら現在も松江市で使われる水の約5分の1を給水しています。

1世紀を経て今も稼動する松江の水がめ「忌部浄水場」は当時の歴史的景観を今に伝えており、緩速ろ過池や付帯施設は千本堰堤とともに国の登録有形文化財に登録されています。水都松江にふさわしい文化財として、ダム周辺の桜とともに市民のよりどころとなっています。

### ■位置図



登録有形文化財・土木学会選奨土木遺産「千本堰堤」  
堤体内部は粗石コンクリートを用い、表面は間知石の谷積。  
堤長 109.1 m / 堤高 15.8 m / 堤体積 7 千<sup>3</sup>m



登録有形文化財「忌部浄水場」



ユニークな形状の高欄



石造りアーチの管理橋